ドクダミ

ドクダミは、たいてい日の当たらないやや陰湿な場所に自生する。

毒下しの妙薬といわれるドクダミ、名前の由来は毒痛み（毒にも痛みにも効く）からとられたであろうと言われている。又、十種の薬に値する。十種の病気に効くということで「十薬」。重ねて薬となるということから「重薬」とも呼ばれる。佐賀の方言としては、この薬がワクド（ガマガエル）が好む湿りけのある所に生えていることから「ワクドグサ」。又、トベラグサ、ヘクソカズラ等とも呼ばれている。

昔から民間薬として広く使用されており、現在でもゲンノショウコ、ハブ茶と共に最もよく使われております。

日本のいたるところの生け垣の下や、裏庭などの日陰に生え、多年草でさかんに繁殖する。全草で特異の悪臭がある。この悪臭の成分はカプリンアルデヒド、ラウリンアルデヒド、デカノイルアセトアルデヒドによるものと言われている。白色の地下茎が横に走り、葉は卵上心臓形で、先端は急にとがり、紫紅色を帯びて、サツマイモの葉のような形をしている。梅雨のころ白色四庁の十字状の花を開き、ガクと花弁とがない細かい花の集まりである。「どくだみや真昼の闇の白十字」「どくだみの花の白さに夜風あり」等と吟じまれて親しまれている。

採取時期は花期（梅雨の頃、この花の開花が梅雨入りの目安になる）で、この時に地上部全草を取り、日光に二日ほどあて、あと日陰干しして乾燥して適当な大きさに切り、紙袋に入れて貯蔵しておく。

薬効

一成分のデカノイルアセトアルデヒドは、カビの発育をおさえ、白癬菌の水虫、たむし、いんきんたむしなどに抗菌性を示す。又、化膿菌に対して殺菌作用もある。

昔から腫物を吸い出すのと、毒下しとに用いられており、そのほかに痔疾患、鼻の病気、打撲、切り傷、毒虫にさされた時、カイセン、かさ、尿道炎、又、毛細血管強化作用もあるので、高血圧、動脈硬化、心臓病等にも用いられる。

使用法

はれもの

生の葉を火にあぶってやわらかくして、はれものの大きさに丸めて、患部にのせ、バンソウコウで止めておくと、早く膿を吸い出し、痛みも少なくてすむ。又は火であぶってからもんで汁を出し、それを患部に塗ってもよい。

痔ロウで痛みかゆみのある場合

生の葉に塩少々入れて、すりつぶし、脱脂綿にのばして肛門にはる。干したもの20gを、水600mlで40～50分火にかけて、その半量になるまで煎じて、一日三回に分けて飲む。

蓄膿症

一日20gを水500mlで、半量まで煎じて、空腹時に一日三回に分けて飲む。少なくとも二ヶ月以上連用しなければ効果があらわれない。生の葉4～5枚を塩でよくもみ、汁の出るくらいにして、まるめて鼻の穴の片一方に挿入し、30分位で鼻をかむと、ウミのような鼻汁が出てくる。これを一日3～4回行うと非常に効果がある。又は、夜床につくときに、鼻の穴片一方につめ、そのまま寝て、約5時間程経過したらとり、鼻をかむと、悪臭のある膿液が出る。その後、もう一方の鼻の穴に同じようにして寝て、翌朝起床のときに同じように鼻をかんで膿液を出す。一日だけでも、翌日は更生したようにさわやかな気分になり、3～4日後には、吐く息にも不快な悪臭がなく、膿液も少なくなってくる。2～3週間続ければ、膿汁はすっかりとれてしまいます。

高血圧、動脈硬化

干したもの20gを煎じ、毎日お茶がわりに飲む。狭心症、動脈硬化を予防し、脳出血の予防にもなる。

腰痛、冷え症、痔

煎汁を浴剤として利用する。よく温まり効がある。

水虫

生葉を塩でもんで、やわらかくして患部にあてる。

便秘

15gを煎服する。2～3日続けても排便のない時は、増量してセンナ葉15枚位加えるとよい。

又、ドクダミ15g、大黄2gを合わせたものを煎服するとよい。

にきび

ドクダミ30gとハトムギ皮付きの粉末20gを一日量として煎じて服用する。又、ユキノシタの生葉とドクダミの生葉をすり合わせたものを患部にはる。

ジン麻疹

ドクダミ20g、ゲンノショウコ20g、決明子（はぶ茶）20gを合わせたものを一日量として煎服するとよい。

毒下し

ドクダミ12gと忍冬8gを一日量として煎服する。

いぼ

ドクダミ15gとハトムギ20gを合わせたものを煎服する。

髪を美しくするには

ドクダミ15g黒豆25gを煎じてお茶代りに服用する。

夜尿症

ドクダミを濃く煎じて、さかづき一杯ずつ、一日5～6回服用する。

養正会薬局　（鍵山）

知っていますか？ おばあちゃんの知恵

暑くなって、汗ばむ季節になってきますと、わきがは、他人はもとより自分自身もいやなものでございます。わきがは、腋窩部の汗が悪臭を放つもので、多汗症を伴うことが多く、その発汗によって悪臭が、一層増加するそうです。これには、焼ミョウバンをガーゼに包み、打ち粉にして腋窩につけたものです。ミョウバンはなめてみるとわかるように、きゅっと舌が引きしまり、唾液が止まってしまうことから、汗を止める作用が大きいことがわかります。

薬剤師　高木　丈夫

こどもの病気シリーズ じんましん

じんましんとは、突然皮膚の一部に発疹ができて赤く腫れ1～2時間程で消えてしまう病気です。小さいポツポツができる時と、それが丘状になり広がって大きな大陸のようになる時とがあります。じんましんには沢山の種類がありますが、大きく分けると植物、薬剤、物理的刺激（接触、日光、機械的刺激、寒冷、運動）など特定の刺激によっておこるタイプと、きまった刺激がわからないままに出没するタイプとがあります。ごくありふれた病気で約1／3の人が人生で一度はかかると言われています。殆んどの場合、数日で治ってしまいますが、ごくまれに長く続くこともあります。

この病気では血液中にじんましんをおこす物質が流れていると考えられます。この物質が皮膚の肥満細胞と血液中の白血球の一種である好塩基球に作用して〝ヒスタミン〟を放出させます。その結果、かゆみやむくみが起こります。

アレルギーの検査をして、食物、薬等に対するアレルギーがあればそれを中止し、あとは症状に応じて薬物療法を行います。抗ヒスタミン薬や抗アレルギー薬を服用し、症状が激しい場合には副腎皮質ホルモン剤も使われます。解毒剤として肝臓の薬を注射することもあります。

じんましんは猛烈なかゆみを伴うことが多いのですが、かくと余計に発疹が広がり、ますますかゆみが増します。出始めにがまんする、早目に薬を飲むことが大事です。また患部に冷やしたタオルをあてるとかゆみが緩和されます。体が暖まるとじんましんが出やすくなりますので、出ている時は運動は避け血行が良くなるようなことはなるべくひかえて下さい。油物、甘いもの、刺激物も炎症を治りにくくさせますのでひかえましょう。

刺激が特定できない時、精神的ストレスが原因ということもあります。受験前や不安な事がある時や、寝不足や疲れがたまって体力がおちてきた時に出ることもあります。親子、学校、友人などで良い関係を保ちましょう。

養正会薬局　薬剤部